

特別クラス優勝記

七段 岡部 寛

読者の皆様、あけましておめでとございます。まことに光栄なことに、2年連続で優勝記を書かせていただきました。戦譜の解説は「連珠世界」誌の1月号に投稿しましたので、こちらでは「読みもの」としての自戦記を意識したいと思えます。あまり面白い文章は書けない私ですが、しばらくお付き合いいただければ幸いです。

この大会5度目の出場にして、いや連珠人生での数ある遠征の中で、これほど「楽しむ」ことを意識したのは初めてかもしれない。飯尾さんや賀茂くんの顔はいい加減見飽きたが（失礼）、久々にお会いする方も多く、初めてお会いする低段者や級位者の打ちぶりをみるのも楽しい。今回は幸運にも、奥村六段との初対局があった。また

2年ぶりにお会いした松尾五段には、あちらから声をかけていただいた。こう見えて年長者にこういう接し方をされるのは大変光栄だという意識は一応残っている。何段になっても忘れてはならないと思う。というより、こちらからご挨拶すべきところを失礼いたしました（汗）。

今までは「遠征費に見合った大会の結果」を重視してきたが、最近はどうして「顔を出す」ことだけでもスカスカの財布から往復の夜行バス代を出す動機になっている。

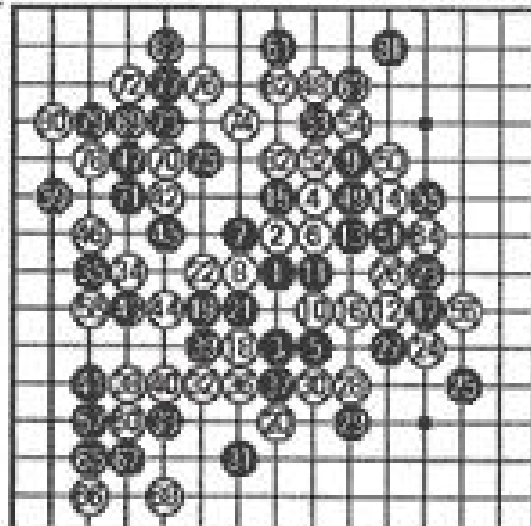
特別クラスの連覇が10年以上出ていないことはわかっていたが、今回は地元勢のマークも厳しくなるだろうし、真剣に狙おうという気は起きなかつた。それよりも、純粹に学生最後の遠征を楽しみたかつた。毎年夕食会にも参加せずそそくさと新幹線で帰る久富さんを見てみると、「翌日の仕事を気にしなくて済む」という学生の気

楽さが身にしみるものだ。あとは、翌日にお土産を美味しそうに食べてくれるゼミ生の顔を見るのも楽しみである（笑）。今回は黒胡麻八ツ橋を購入せよとの厳命が下っていたので、夜行バスで到着して京都タワーで一風呂浴びた後、朝のうちに手に入れておいた。

さて、一局も戦譜を載せないのはさすがにまずいだろうから、連珠世界には載せなかつた長谷川名人戦をご紹介しよう。

大会の成績を見れば、いや出場メンバーを見ただけで、真つ先にこの一局を見ただけなる人が多いだろう。それでも連珠世界に載せなかつたのは、見所のない戦譜になつてしまつたからである。もちろん瑞星が悪いのではなく、お互いそういう打ち方をしたというだけの話だ。ただ中盤で長谷川名人がぼやいていたように、たつた35分の持ち時間で打つ局面ではな

先黒名人長谷川一人(35分)
白七段岡部 寛 (35分)
X 83にて満局引き分け
(5↓10)



かつたが……
「世界の最先端を見せてもらおう」と言いながら瑞星を打たれたので、世界選手権でタイムラに打たれ、同じラウンドでチンギンも打つていた作戦を拝借した。白14から占めた恰好なので、たしかに大満足の形である。しかし白有利とまでは言えないだろうか。私が弱いだけかもしれ

れないが：

黒27と31という打ち方をされれば、誰でも攻めることを考えたくなる。しかも残り時間は私が大きくリード。しかし右上を中心の色々と考えてみたが、どれも決定的な攻めにはなっておらず、流れに沿って左辺へ展開することにした。白38でなんとなく形になり、黒39は「仕方ない」という手つきだったが、結局大きな波は起こらなかった。もっとも白の本命は右上であり、そちらへ援軍を送れば成功なのだが、もちろん長谷川名人はお見通しで、それさえ許してもらえなかった。挙句の果てに、終盤は後手を引く始末。結果的には白32で右上へ手をつけるほうが良かったかもしれない。

あとはお互い10手5分を打ち切るのに必死で、満局へなだれこんだ。

と、突然連勝し始めることが挙げられる。級位者時代からずっとそうだ。最近の典型的な例が飯尾七段戦で、06年のアジア選手権で圧勝したのを境に、天敵を逆にカモるという状況が続いている。あの時は飯尾七段が明らかに気合不足だったので、「連珠の神様はこういうのを見逃さないんだよなあ」と妙に冷静に客観視したものが、今のところまさにその通りとなっている。そういう意味で持ち時間が短い対局はチャンスであり、今回長谷川名人に初勝利を狙っていたのだが、やはり甘くなかった。

（若手の発言としては不適切かもしれないが：やはり岡部は若手ではないという解釈が正解？）。序盤から中盤ではろくに着席もせずウロウロ歩きまわる私だが、局面が煮詰まれば近寄りがないオーラを発しているはずだ。特に今回は熱戦続きで、たつぷり頭を使って汗をかいた。それで充分である。脚付き盤は、もっと喜んでもらえる人のために、2年連続で東京連珠会の「坂田杯」に提供させていただいた。また賞品の使い回しになってしまったが、お許し願いたい。優勝カップは、奥さんや子供、孫に自慢できる日が来るまで、大切に保管しておこうと思う。

折りしもこの日は、ブログ開設1周年の記念日であった。

（というわけで今年も宣伝ー ブログ「二二三号室」http://blog.livedoor.jp/hs_okabe/）

Bクラス優勝記
初段格 内田 伸吾

リアルでの連珠大会出場は去年の九州大会のみで今回は2度目になる。

3年半程前からインターネットで連珠を覚え打っていたのだが、昨年地元である佐賀に連珠会ができたこともありリアルでの連珠に触れる機会が増えてきた。

今年の春に仕事で関西へ引越して来てようやく仕事にも慣れ時間が作れるようになったので以前より興味があつた本大会へ出場することにした。

大会申し込み前に随分某氏にAクラスへの出場を薦められたがネット上で打っていても関西勢の強さは理解しており様子見も兼ねて級位どおりのBクラスにする。

九州大会時は初の大会出場ということもありそれなりに対策や勉強をしていたのだが、それがほとんど役

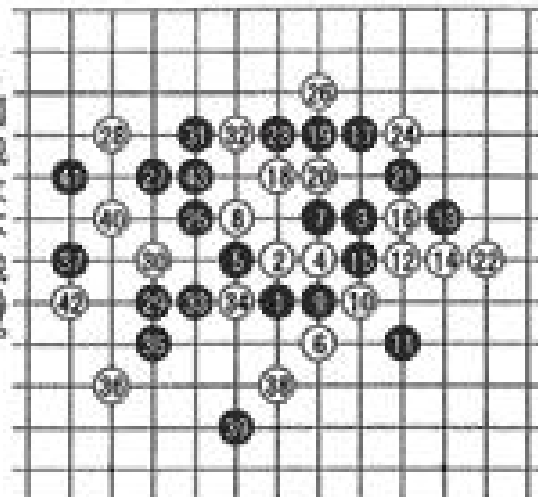
に立たなかつた事もあり今回は何も策も練らず前日にネットでも某氏と調整の為に数局打った程度で挑むことにする。

大会出場を公言してから廻りから「優勝しろ」「脚付き連珠盤をゲットしてこい」等と散々言われ強いプレッシャーを感じながら不安なまま会場へ向かうことにする。

1回戦、仮先でいつも打っている疎星を提示。黒を持ちたかつたのだが白番。序盤は定形どおりに進む。

白20が悪かつたみたいで一気に黒一色に染まつていく。中盤以降はある事があつてかなり気持ちが悪くてきている。後はきれいに追い詰められる。黒43にて投了。乱れた気持ちを落ち着かせるために一服。いつもネットでも打つときは煙草を吸いながらなので打ちながら吸えないのがかなり辛い。

黒勝 斎藤正志 3級
先白 内田伸吾 1級
黒43にて白投了



2回戦は不戦勝。

3回戦、佐伯5級に斜月を提示。黒に好き放題に攻められ負けを覚悟したのだがなんとか凌ぐ。そうなると白が黒をぐるりと囲む形になつており、四々禁に嵌め勝利。

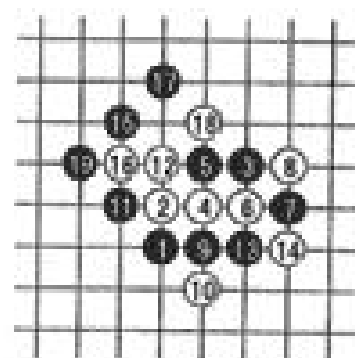
4回戦、蜂須賀5級に名月を提示される。ネットではほとんど打つたことがないが黒有利だろうという理由だけで黒を選ぶ。白4がこれまた見た事がない場所で非常

に悩んだ。ずっと白に攻められる展開になり黒三々禁の負けが見え終わつた...と思つていたところ見落としたらしく別方向へ展開していく。そこをなんとか凌いで先租の禁を潰す。黒に剣先がかなりあり有利な展開に発展していく。ところが四追いと読んでその部分が完全に潰れてしまった。

後の検証で黒に追い詰めがあつたらしい。そのまま混戦が続き満局?と思つた矢先に黒の追い詰めが発生。なんとか勝ちを手にする。

5回戦の相手は田中4級。やつと疎星の黒番をゲットする。得意疎星型だけになんとしてでも勝ちたい。混戦を予想(むしろ混戦が好きなので狙つていった)していったが速攻で追い詰め勝ち。不戦を含め一連終わり戦績を見てみると俺がトップ。残りの局数も知らずにそのまま後半戦へ...

黒勝 内田伸吾 1級
仮白 田中新悟 4級
黒19にて白投了



6回戦、佐伯5級との対局。疎星型は松月。最後は白の守りが甘く追い詰め。その後の検証は実に面白かつた。

7回戦。いよいよ優勝が見えてきた(田中戦)。だが、それが仇となることに...。俺の棋風は黒でも白でも守りながら手を広げ呼珠をバラ撒いて組み立てるタイプ。ところが序盤から勝ちたい一心で一気に攻めようとして普段なら三を引かない局面でも引いてしまふあつと

いう間に引き詰まりになる。それでも無理やりに攻め続けるものの状況は悪化するばかり。右上がかなり白有利な展開になってきている。

なんとか追い詰めがないだろうかと悪あがきしてみたら無いものはやはり無い。黒投了。

泣いても笑ってもこれが最終戦。斉藤3級から名月を提示される。初戦の負けをリベンジしたく、また完全な優勝を狙う為にまたもや黒有利だろうという理由だけで黒を選択。

全く学習能力がない。やはり白4は見た事がない手。なんらかの策があるのだろうか。だがどこに置いてても白有利にしか見えず随分と悩む。実際そのとおりであつと言う間に投了。

全対局が終り、その時点で3敗が3人。優勝決定戦でもあるのかな?と思っていたら「優勝です」と言われて驚く。何やらポイント制でそう

なるのらしい。

念願の「脚付き連珠盤」を手にする。おまけに「初段入段権」まで貰った。

全対局を振り返って自分で納得できる局がなく、本当にこんな物貰っていいのだろうか?と思っただが、貰った物は仕方がない。

実力がそれに追いつくように今後も努力しなければ...と思っただ。

また、この大会で自分の欠点や課題が浮き彫りになったのでそこを埋めるべくこれからも精進していこうと思う。

有難う御座いました。



内田(右)―斉藤(左)戦

題数指定打ちについて

六段 斎藤 秀一

初心者から高段者まですべて「題数打ち」にする訳にはいかない。したがって私案だが、次のように区切をしたらどうだろうか。(以前から考えていた)議論をお願いしたい。

6級から10級まで

「5珠自由」

1級から5級まで

「5珠2題」

初段以上

「題数打ち」

あくまで「珠型交替題数指定打ち」になった場合の話であるが、具体的に示す必要があるだろう。

次に満局については黒・白に共に5勝。「テクニカルドロウ」をさせないために80手を超えたら合意満局の権利が生じる。(これは、現在審議をお願いしている)

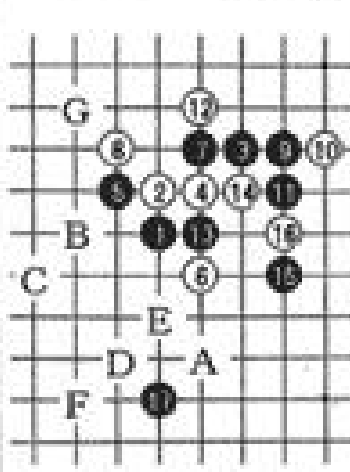
現在、スウェーデンの(メヨ)ンソンルール、ロシアの(メタ)

ラニコフルールの情報が全くないが、現状はどうなっているのかさっぱりわからない。日本の「題数指定打ち」では、データを積み上げていくしかない。連珠世界に題数打ち用の講座を書いているが、私の「連珠ゲーム2」の本を合体すれば、今からでも題数打ちができる。具体性のないルール改正論は、ないので同じである。

『疎星』黒5について

六段 斎藤 秀一

譜は疎星の一変化。黒11迄はすでに昭和初期には打たれていた。黒7は13もある。14は最強とされる防ぎで、黒17をAは旧ルール派で打たれた。その時白18を17と打たれ激戦になった。黒はBとトンでCにヒク手がある。次白17と打たれるからだ。黒15を17なら白16か?この17に対し、白D黒EかFと展開するところか。

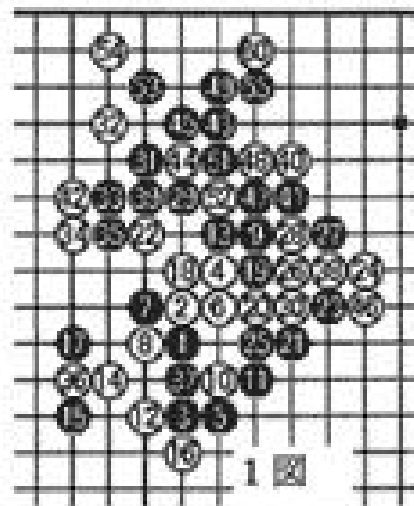


旧ルールなら、この展開は黒が有利と思う。盤が広い。(現行ルールなら互角だろう)その後黒9をヒカずに単に11にコスムのが現われたたぶん戦前には打たれていたに違いない。(確率は高い)黒はGも好点だ。旧ルールでは黒5を12へ打って、必勝が出ている。富森信男氏の「長星必勝法」(上・下)で実際は「珠星」必勝法だろう。故に旧ルールで戦える作戦は白竜の白14しかない。私が旧19道四々勝ちルールを完全に否定するのは「ただなんとなく」ではなく、裏付けがあるからだ。吉沢衆三郎氏はこういうことを知ってか知らずか察立っていった。

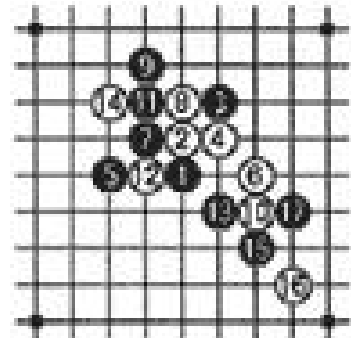
研究いろいろ

六段 斎藤 秀一

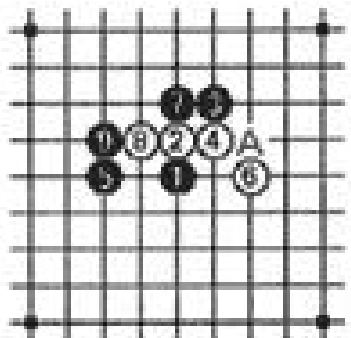
以前「瑞星」の旧ルールでの必勝法について述べたが、黒37の変化をお送りする。偶然出てきたもので、山下楠水氏の筆跡である。それが(1図)で、黒55迄。参考にして下さい。



(2図)は私の本「連珠ゲーム2」P107(36図)で、白6を8は35図である。黒に少し疑問が残る。(3図)そこで黒7。白8をAなら黒8で恐らく黒勝ちでしょう。黒9迄。どう判断しますか?

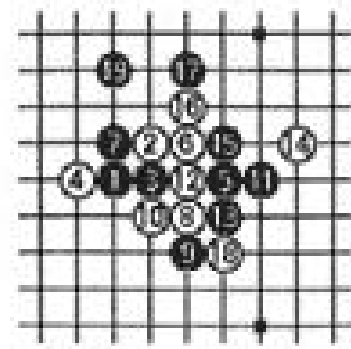


2図

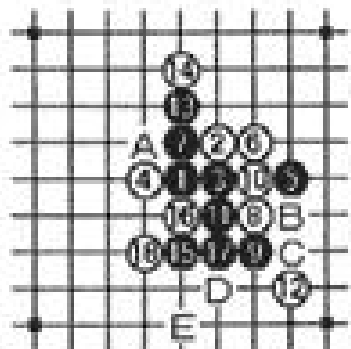


3図

(4図)「珠友」9月号の中で白6迄は河村典彦氏が書いていた。黒19迄。この5は「連珠世界」へ投稿済で、近い将来、掲載されると思う。実はこの5は、青木栄山氏の研究でそれを要約して「連珠世界」へ投稿した次第。それにしても青木栄山氏はすごい、尊敬に値する。



4図



5図

(5図)白10の変化。白12はAが強い?次黒B白C黒D白E以下、黒勝ちがあるのか。白8を16でも黒9か。以上、4・5図は青木栄山氏の研究。この黒5は、白6を10で必勝があるかどうか分からない。これからの研究で皆さんで研究をお願いしたい。